

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成29年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機 関 名	お茶の水女子大学		整理番号	T02
プログラム名称	「みがかずば」の精神に基づきイノベーションを創出し続ける理工系グローバルリーダーの育成」			
プログラム責任者	森田 育男	プログラムコーディネーター	古川 はづき	
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラムは順調に進捗している。特に学生が PBTS (Project Based Team Study)、海外グローバル研修等を主体的に取り組むことにより、生き生きと力強く自分の意見を述べるのが印象的であった。これまでの改善が効果を上げ、学生は飛躍的に成長し、優れた学生が育っており、運営も円滑になった。 ・若手特任教員や豊富なキャリア経験を持つ学生指導カウンセラー (3名) を配置した相談室が整備されたことで、学生の日常活動や研究活動に関して身近に相談できる環境がうまく機能していることがうかがえた。 ・中間評価時の留意事項である企業インターンシップの支援強化については、キャリア支援担当者の配置等により組織的な整備がなされている。 ・優秀な学生の確保については、目的意識を持った他大学出身者など意欲のある学生を確保しているが、充足率が低く、引き続き学内外への活発な周知活動が必要と思われる。 <p>2. 意見 (改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の現地視察時と比べグローバル研修や PBTS の運営が改善されたと感じるが、学生のマネジメント能力を実践的に身に付けさせる仕掛けがまだ少ない。これは座学では身に着かない能力であり、意見やバックグラウンドの違う人達をまとめる力は社会人になって重要である。他大学との交流プログラムを行う時に学生が主体的に運営する訓練等はすぐ実行可能であるので、改善に努められたい。 ・中間評価時の留意事項であった本プログラムの成果の共有については、種々の会議等において情報の発信と共有は行われているが、大学院改革につなげるためには履修生が成長している姿や、その過程を全教員・学生に示していくことが必要である。本プログラムの趣旨や履修生の活動に対する理解と協力が不十分な教員が少なからず存在するようであるので、更なる改善が望まれる。 ・充足率に関しては、M1 入学時に博士課程まで進むと決めている学生は多くないことなどを考慮して、主専攻側が学生を積極的に参加させるためのインセンティブ等の工夫をして互いにメリットを享受する仕組みを作ることが必要である。 ・主専攻の学業と同時に本プログラム目標を達成できるか不安に感じている学生が見られるので、fQE (final Qualifying Examination) の審査基準を速やかに設定・提示していただきたい。QE の仕組みと PBTS は本プログラムにおいて優秀な学生育成のための重要な要素であるので、QE のフィードバックも含め、学生との双方向のやり取りを通して内容を充実させることを望む。 ・平成 29 年度よりプログラム責任者の交代があった。学長と共に全学の教員へ本プログラムの主旨を徹底し、今後の大学院教育の改革につなげてほしい。現在の PBTS が文理融合型に発展し、QE システムが全学的に整備されれば、ユニークなお茶の水女子大学型博士課程教育モデルが確立され、グローバルに活躍できる多様な博士人材・女性のトップリーダーの育成が期待できる。 				